

ニュース再チェック!

7月23日は一年で最も暑さが厳しいとされる「大暑」。暦通りにこの日、埼玉県熊谷市で観測史上最高の41.1度を記録しました。気象庁は臨時記者会見で「命にかかわる危険な暑さ。一つの災害であると認識している」と述べました。気象庁は9月上旬までに複数回の猛暑がある可能性を示唆しています。

今年の猛暑は日本だけではなく、米カリフォルニア州や北アフリカでは50度以上を観測。北欧の北極圏では30度超えを記録し、森林火災も発生しました。専門家は異常気象が長期的な地球温暖化の傾向と関係があるとしています。

国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)は現状の温暖化ガスの排出が続くと今後10年あたり0.2度ペースで地球の平均気温が上昇し、2040年ごろには産業革命前よりも1.5度上昇するとの予測をまとめました。「1.5度程度か」とは思わないでください。これまで数100年ごとに地球を襲った氷河期は平均気温が0.5度低いただけなのです。地域によっては気温が5度以上も上昇したり雨量が10%以上増えたり海面が上昇したりと様々な影響が予想されているのです。既に産業革命前より地球の平均気温は1度上昇しています。異常気象は天災ですが人災でもあるのです。

猛暑を受けてエアコンやアイス、ビール、日傘と暑さ対策商品の販売が好調です。その一方で高温と雨不足で夏野菜の出荷量が減少し価格が高騰しています。暑さ対策はやむなく消費するものがほとんどです。そのため夏に出費がかさむと、秋以降は家計が節約モードに入ります。記録的な猛暑だった1994年と2010年は7~9月に増えた消費が10~12月には落ち込みました。

日本経済新聞社が四半期ごとに消費関連企業の景況感を示す「日経消費DI」の7月調査では業況判断がマイナス5と5四半期ぶりにマイナスに転じました。この調査後に発生した西日本豪雨や記録的な猛暑で、個人消費の先行きの不透明感さらには増えています。

2040年1.5度上昇進む温暖化

— IPCC予測 猛暑や豪雨多発 —

温暖化ガス「実質ゼロ」訴え

気温が1.5度上昇したときに予想される影響

- 気象**
 - 大気中の水蒸気量が増え、1日に降る雨の量が約10%以上増える
 - 気候が1度以上高くなる地域も出る
- 海洋**
 - 海の酸性化が深刻
 - 潮位が極端に高くなる
- 健康**
 - 生物を媒介した感染症が増える
 - 食料や水の確保に影響が出る

【注】IPCCの資料などから作成

2018年7月24日
日本経済新聞 朝刊1面(抜粋)

続く猛暑複合要因

ダブル高気圧にフェーン

気象庁来月も警戒を

「強い熱風が気温上昇の要因となった」

2018年7月24日 日本経済新聞朝刊2面(抜粋)

消費先行き懸念広がる

日経DI 5四半期ぶりマイナス

業況判断はマイナス圏に転落した

2018年7月27日
日本経済新聞朝刊13面(抜粋)

続く猛暑生活直撃

野菜高騰、キャベツは2倍

猛暑などで店舗価格は値上がりが目立つ

- キャベツ(13) 170~230円 3割高~2割
- レタス(13) 130~160円 2~3割高
- キュウリ(13) 50~60円 3~4割高
- ダイコン(13) 180~200円 1~2割高

【注】都内スーパーの小売価格より作成

2018年7月26日 日本経済新聞朝刊3面(抜粋)

日経なら、Wプランが断然おトク!

毎月の新聞購読料に +1,000円で、さらに特典も!



新聞(宅配)



電子版



「日経W倶楽部」の特典

TICKET

美術展・イベントなど
無料招待・割引



会員限定
セミナー開催



書籍・グッズなど
プレゼント

「日経W倶楽部」の詳細はこちら
<http://www.nikkei4946.com/nwc/>

日経W倶楽部

検索